

# イベント・プロデューサー視点での安全対策責任の考察

## ～明石世紀越えイベント「ジャパン・カウントダウン 2001」安全対策分析結果から提起～

○貝辻正利(神戸大学大学院・セーフティアドバイザー代表)

北後明彦(神戸大学都市安全研究センター教授・学術博士)

キーワード：大規模イベント、高密度群衆滞留、安全対策、危機回避

### 1. 背景と目的

2001年明石市民夏まつり朝霧歩道橋雑踏事故は主催者・警察・警備会社が刑事・民事責任を問われ社会的責任が追及された。9年を経過してイベント構成主体である主催者、イベント企画者、警備会社間に安全対策の取り組みに落差が認められ風化が懸念される。本研究は、明石市民夏まつりと同じ会場でその約7ヶ月前に開催された「ジャパン・カウントダウン 2001」で発生した雑踏事故寸前の高密度群衆滞留の予見と高密度群衆滞留危機を回避できなかった要因を分析した結果明らかとなったイベント・プロデューサー視点での安全対策責任の提起を目的とする。

### 2. 研究方法

2000年大晦日～2001年元旦にかけて明石大蔵海岸で開催された「ジャパン・カウントダウン 2001」でJR朝霧駅と会場を結ぶ朝霧歩道橋で発生した高密度群衆滞留について、このイベントの会議記録や警備計画書、その他明石市民夏まつり事故調査委員会報告等の資料及び筆頭著者が警備企画と警備実施管理総責任者として危機回避の自主警備隊の指揮を行った他、警察機動隊指揮官及び博覧会等国際的大型イベント安全対策企画・実施管理経験のノウハウを基に事例分析を行う。

### 3. 分析結果

#### 3.1 「ジャパンカウント 2001」での高密度群衆滞留の実態

メインイベントのカウントダウン演出開始の23時55分ごろから花火(0:00～0:10)終了にかけて群衆滞留が始まり約35分間雑踏事故寸前の高密度群衆滞留が発生した。(図2 A、B、C点)

群衆密度と人員は、A点(展望スペース)12人/m<sup>2</sup>約900人、B点(階段)7人/m<sup>2</sup>420人、C点(歩道橋南端)12人/m<sup>2</sup>約1,440人合計2,760人が滞留したと推計される。



図1 会場レイアウト及び結節点概要図 ○印～結節点

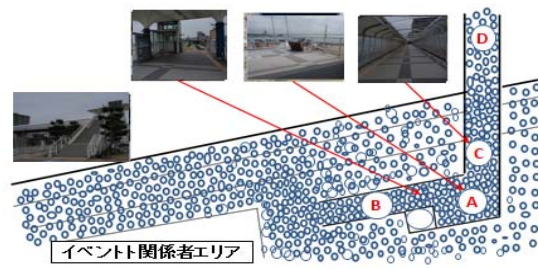


図2 高密度群衆滞留イメージ

#### 3.2 開催実態及び会場適正

開催実態は、来場者は予測の2倍強(表1)、会場内混雑状況は23時計測4万人で平均密度1.2/m<sup>2</sup>でステージ前や協賛ブースエリアに分散しており雑踏上の問題はない。

結節点通過可能人員推定は、朝霧歩道橋1万4千人/h、大蔵朝霧陸橋6千人/h、その他西方向4千人/h計2万4千人である。結節点通過状況推計は表7に示す通りである。特にカウントダウン花火終了時点推計は、23時計測の4万人を基準にステージ前残留約1万人、23時から帰路に着いた者約1万人強、約2万人が主要導線歩道橋を中心に一齐に帰路に着いたと推定できる。高密度群衆滞留発生時の朝霧歩道橋、階段下及びJR駅前滞留を加えると約1万5千人弱が滞留したと推測出来る。会場内及び会場と会場周辺との群衆流動連動性を考察すれば、群衆流動連動性に関する諸対策を講じない限りカウントダウン行事の会場適正に大きな課題が存すると言わざるを得ない。

表1 来場手段別来場予測

項目	人数	%	備考
自家用車	0	0	駐車場なし
電車 JR	21,400	86	相当な準備
自転車	1,800	7	駐輪場確保
徒歩	1,790	7	
その他	10	0	車いす参加
計	25,000		

来場者総数 55,000人(実行委員会発表)

表2 結節点流動推計

結節点		～23時	～24時	～1時	計
朝霧 歩道橋	流出	4,100	14,000	10,500	28,600
	流入	12,000	1,700	800	14,500
大蔵朝 霧陸橋	流出	1,200	3,000	2,000	6,200
	流入	3,200	2,100	200	5,500
その他	流出	1,600	1,800	1,800	5,200
	流入	100	1,000	100	1,200
流出計		3,900	18,500	14,500	40,000
流入計		15,300	4,800	1,100	22,500

#### 4. 高密度群集滞留の予見と高密度滞留危機回避が出来なかった要因

事例分析の結果次の要因が明らかとなった。

##### 1) 朝霧歩道橋での高密度群衆滞留の予見ができなかった要因

イベント構成主体をはじめ警察・消防・行政が情報を共有し、開催現場に基く会場適正など総合的な安全対策検討と危険箇所抽出による危険認識を共有しなかったこと。

##### 2) 高密度群衆滞留危機を回避できなかった要因

警備計画の検討不足、警備本部員の技能とイベント構成主体や警察との連携不足の可能性が高い。しかし、早期に一方通行を実施しても歩道橋の目隠しなど構造上の措置が無かったため花火打ち上げ時の群衆滞留と混雑範囲の拡大は回避できなかった。

#### 5. イベント・プロデューサー視点での安全対策責任に関する考察

雑踏事故が発生すれば刑事・民事及び社会的・道徳的責任が問われ、イベント効用のみならず社会的・経済的損失を考える時、安全対策はイベント関係者全体の責任であることは明白である。

分析の結果明らかとなった重要な要因の一つは「イベント関係者による総合検討の欠如」であるが、そのうちイベント・プロデューサーに関わる事項は次のとおりである。

##### 1) イベント・プロデューサーの安全対策責任で求められる視点

\*安全対策の温度差がイベント構成主体の間隙に埋没しないかとの視点

専門分野の枠内だけでの活動は安全対策の間隙を生む。

\*イベント企画における安全対策の所在に関する視点

企画の早い段階から安全対策検討を行う視点が求められる。

##### 2) イベント・プロデューサーの安全対策責任に関する提起

①会場適正評価 ～\*前記3.2に記す会場と会場周辺の群集流動連動性の検討

②会場空間利用評価～\*会場空間利用(レイアウト)と円滑な群集流動の検討

\*会場出入り口対策。特に、露店設置個所の選定

③来場者予測評価 ～\*より精度の高い来場者予測の在り方の検討

過去の経験値では予測と実態の乖離は2倍から6倍に及ぶ。

④イベント計画検討～\*企画構想が来場者層など安全対策上の重要な情報となる。

\*プレ・イベントとアフター・イベントの在り方の検討

⑤イベント広報評価～\*イベント広報内容の検討 \*来場経路、特に来場者誘導規制措置

#### 5 結論

イベント安全対策は、イベント安全対策に係わる関係者による情報共有と総合検討及び警察指導結果に基く具体的な警備計画策定と卓越した警備技術でより向上可能であるとの視点を共有することがイベントの成功に直結する最良の対策である。